学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０１８年７月７日
文責：ＪＵＮ

教師が学ぶということ

どんな職業でもそうですが、教師という職業には高い専門性が必要です。教師の仕事は子どもたちの学びと成長にかかわるものだからです。子どもたちの未来につながるものだからです。

大学を出てまもなく就職したとすると、定年が６５歳まで延びたとして、退職まで４０年を超える年月、教師として歩み続けることになるのが私たちです。教師の専門性にこれで完成というものはありません。ですから、教師は、教師として歩む年月、自らの専門性の高まりを目ざして終わりのない歩みを続けることになります。ただ、私は、終わりがないということについてネガティブな思いを抱いていません。考えてみれば、人生もまた終わりのない願いと希望と目標を有して歩むものです。大切なのは、願いや目標が達成できたかどうかだけでなく、自らの歩みの営みに納得できるかどうかだと思います。そしてその納得は、どれだけ挑戦したか、実践したか、そして、その挑戦と実践に謙虚に向き合ったか、事実から、他者から学んだか、そうした自分の行いによって生まれるのだと思っています。

１　信念を貫くとは固執することではない

先月の「たより」で「信念を貫くこと」と「固執すること」の違いについて述べました。このことは教師の専門性」の養いと深く関係することなので、再度読んでいただくことにします。

教師に限らず、自分自身の考え方を頑固に崩さない人がいます。もちろん、右に左にころころと変節する人もいます。生きるということは、さまざまな人や出来事との出会いなのですから、その出会いのたびに擦り合わせが起こり、深い共感も強い反発も生まれ、そこから新たなつながりが出来ることも深刻な亀裂・断絶が生じることもあります。私は、そういう出会いのあり方に、その人の人柄はもちろん人生観や職業観、見方考え方があらわれると考えています。それはその人の人格だと言ってもいいのではないでしょうか。

右に左に変節する人には信念がないのではないかとよく言われます。逆に、だれが何といっても考え方を変えない人のことは、頑固一徹過ぎてとっつきにくいとも言われます。そこから見えてくるのは、信念を貫くことは大切なこと、一方、あまりにも自分の考えに固執することはよくないことという生き方です。私たちは、だれもが、この二つの狭間で揺れながら、揺れない人もいるにはいますが、多くの人は迷いや悩みを生じさせ絶えず揺れているのではないでしょうか。

ただ、ここではっきりさせておきたいことがあります。それは、信念を貫くということと固執するということは同じではないということです。その違いはどこにあるのでしょうか。

信念とは正しいと堅く信じることです。ただ、そのとき、なくてはならないことがあります。それは事実に対する謙虚さです。人がどのように考えようがそれはその人の自由だと言う人がいます。しかし、子どもたちの未来を担う教育に携わる教師は、その信念が多くの子どもに影響を与えるものだということを忘れてはなりません。事実がどうなっていようとも、それは私の信念だと言って済ませることはできないのです。もっとも大切なものは、子どもに表れる事実です。

教師は事実をみる目と感覚を養わなければなりません。そして、事実から学ばなければなりません。それまで「これはこうだ」と考えていたこと、つまり自分の考え方も、事実との突き合わせによって変えていく勇気を持たなければならないのです。信念を貫くとは、何も変えないことではなく、事実を基に自らのあり方を創造していくことなのではないでしょうか。

それに対して、いつまでも固執するとはどういうことでしょうか。それは、事実を見ようとしないことです。事実がどうあろうと、自分の考え方を変えないことです。それは、いまある自分を守ろうとする考え方です。そして、事実から学んで、よりよい自分を創造するのではなく、自分の頑なな考え方ややり方に、事実を合わせようとすることです。そうなってしまうと、事実を自分の色眼鏡でしか見ないので、自分の周りに生まれている素晴らしいものも、そうでないものも見えなくなってしまいます。そして最終的には異なる考えに対する感情的拒絶を抱くようになってしまいます。

教師の場合こわいのは、そういう姿勢のちがいが、すべて子どもに跳ね返っていくことです。たくさんの子どもたちの未来につながる日々を請け負っている私たち教師が、ゆるぎなく一貫して目指していかなければいけないのは、子どもの成長、学びの深まりにつながる教師としてのあり方です。迷っていい、悩んでいいのです。その迷い、悩みの中から、事実をみつめ、事実から学び、教師としての信念を求め続けていきたい、第一線から退いた今でも、私はそう思います。

２　自分を変えようとしているベテラン

Ａさんは、いわゆるベテランの域に達している教師です。そのＡさんが、この年担任した一年生の子どもを前に、思わぬ苦労をしいられていました。じっとしていられない子ども、対人関係の築きにくい子ども、すぐ感情的になる子ども、逆にほとんど言葉を発しない子どもなど、ケアの必要な子どもが何人もいて、それらの子ども一人ひとりに心を砕けば砕くほど、悩みが増すという日々を送っていたのでした。

入学して半年が過ぎようとする十月、Ａさんの教室を訪れた私は驚きました。子どもたちの様子が一変していたのです。五月に見たざわざわ感、落ち着きなくきょろきょろして学びに集中できない表情がすっかり影を潜めているのです。「ほおっ！」、思わず私はため息をつきました。

私がＡさんの教室にいることのできた時間は５分にも満たないものでしたが、その短い時間でわかったことは、子どもと子どもに関係性が生まれているということでした。五月のＡさんは、担任として一生懸命子どもにかかわっていました。それはそれで大切な教師の対応です。しかし今回私が目にしたのはそういうＡさんではなく、おちつきなくきょろきょろしていた何人もの子どもにぴったり寄り添う子どもの姿でした。その寄り添い方に包み込むような温かさが感じられたのです。

Ａさんのようなベテラン教師は、これまでかなりの授業研究を積んできています。そして、若い教

師にはない指導技術を身に着けています。それでも、その技術が通用しない子どもが現れるのです。それほど、時代は変遷するのだし、子どもはその時代によって変わるのです。教師は、変わる子どもの状況に合わせた対応力をつけなければならないのですが、それが難しく、多くのベテラン教師が苦労しています。Ａさんもその一人だと言えるでしょう。

その原因の一つに、日本のこれまでの授業研究が教師の指導技術という側面からしか行われてこなかったことがあげられます。それは子どもの側から考察する指導法ではなく教師のやり方を考察する指導法だったからです。それでは、変わる子どもの状況に対応することが難しいのです。複雑化する子どもの状況を考えず、子どもの状態を固定的に考えてしまうからです。

もともと指導技術は、子どもの学びを豊かにするため、豊かな子どもの学びを引き出すために必要なのです。それは時代の変化にかかわりなく不変のものです。教育は子どもを教師の考える枠にはめ込むためのものではなく、子どもの個に応じて引き出すものでなければなりません。ましてや、今は、子どもが自ら獲得する学びを目ざした「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められています。しかし子どもの状況はますます複雑化している、だから、もっと子どもをみつめ、子どもの状況に何が必要なのかを考え、子どもが夢中になって取り組む学びをつくり出さなければならないのです。それには、授業技術を教師側から眺めるのではなく、学ぶ子どもの側から検討することが不可欠だということなのです。

Ａさんの教室の様子がたった５か月で一変したわけはどういうことだったのか、Ａさんがどういうふうに考えてどういう取り組みをしたからなのか、その詳細は私にはわかりません。ただ、一つだけわかったことは、このとき私が目にしたような子どものつながりは五月にはなく、ただＡさんがあたふたと子ども一人ひとりにかかわっていたということでした。そのことから推測して、子どもの学びは、子ども同士のかかわりで、子ども同士の聴き合いと支え合いで深めることができるのだと考え、ペアで学び合うことを徹底して実践してきたにちがいないということでした。それは、これまでのＡさんがやってこなかった指導方法だったにちがいありません。Ａさんは、子どもの現実に直面し、その現実から学び、これまでにはない指導法をとったのです。

私は、信念を貫くとは、何も変えないことではなく、事実を基に自らのあり方を創造していくことだと述べました。教師として歩む年月、自らの専門性の高まりを目ざして終わりのない歩みを続けるのが教師だとも述べました。Ａさんは、まさに、その通りのことを実践されたのでした。

ベテラン教師がそれまでにない授業に転換するのは容易なことではありません。Ａさんがそれを実現できたのは困難な子どもの状況に直面したからで、そうでない学級担任だったらできていなかったかもしれません。人は、困難に立ち向かうとき、その人の人となりが現れるものなのでしょう。

３　どんな教師も不安を抱えている

私は学校訪問をすると、必ずその学校のすべての教室に入ります。そして、そこで行われている教師と子どもの営み（授業）を観察します。もちろんその学校のすべての教師たちとともに、一人の教師の授業を参観し協議検討も行うのですが、それだけだとその授業以外の教師たちの授業づくりが進まず、ひいては学校としての取り組みも弱くなるのです。要するに、人は、自分自身の事実を見つめなければ自らを高めることはできないのですから。

私は、見せてもらった授業に対して、参観時間がたとえ３分ほどのものであったとしても、一人ひ

とりの教師になんらかのコメントを伝えたいと思っています。だから、私が訪問する多くの学校では、時間のやりくりをして、個別、あるいは学年単位での私との対話の場を設定してくれています。

校長室、あるいは会議室で、私は、次々とやってくる教師たちと面談します。もちろん、長い時間ではありません。限られた時間です。限られた参観時間で得た限られた気づきを限られた言葉で伝え、それを契機にいくらかの言葉の行き交いが生まれる、そういう私との対話がそれぞれの教師の授業づくり、子どもとの対応の力になってくれれば、そういう願いを抱いての拙い私の行為です。もちろん、私の伝える内容が絶対的なものだとは思わないし、それでそれぞれの教師の授業がよくなる保証はどこにもありません。けれども、どの学校でも、すべての教師が授業デザインを作成して私に授業を公開してくれているのです。そんな教師たちの行為に少しでも報いたい、それは私の義務だと思っての行動です。

私の前に坐る教師たちは、人それぞれ、さまざまな表情をされます。私はいつも思います、それぞれの表情の向こうには、その人の教師としての歩みがあり、授業づくりへの考えがあり、教室の子どもたちとの日々の営みがあり、それゆえの悩みもあるのだと。そして、石井からどういう言葉をかけられるのだろうという期待と不安を抱いておられるのだと。

どんなコメントをされても、しっかり受け止めよう、今の状態を少しでも良くするため、出来る限りのことを吸収しようとされている人の目は澄んでいます。授業における状況がよくなくて悩みの真っ只中にいる人は、その気持ちが表情に表れます。考え込むようにされる人、私の目を食い入るように見つめる人、逆に呆然とした状態になっている人など、それこそ千差万別です。中には、この悩みは分かってもらえないと私と距離を置こうとする人がいないわけではありません。私は、そういう一人ひとりと対話をするのですが、そのときどんな表情を目にしても、たとえどこか噛み合わない雰囲気があっても、その人の内にあるものを推し量り、その人に伝えなければならない事柄とそれを語る言葉を探さなければならないと思っています。「学びの共同体」の学校は、一人の子どもも一人にしない、一人の教師も一人にしない学校なのですから。

ただ、授業を参観した直後、憤りを覚え、その思いが抑え難くなることがあります。それは、授業を受けている子どもの学ぶ気持ちがないがしろにされていると感じたときです。教師がなんとかしなければと懸命になるのだけれどうまくいかないという状態では、授業がどんなによくなくてもそういう感情にはなりません。苦慮する教師のことに思いをはせ、どうしていけばこの壁を乗り越えることができるだろうかと、その教師の立場に立って考えることになるからです。そして、面談の時にこの状況とたたかっている授業者の悩みに寄り添わなければと思うのです。

けれども、学ぶ子どもの気持ちをどこかに置いてきたかのように一方的に進められる授業を前にすると、わたしの心の中にむらむらと憤りの感情が湧き起こるのです。それはわたしには耐え難い時間です。そこにいる子どものことを考えると見ていられなくなるからです。

しかし、そういう授業をした教師とも面談をしなければなりません。そこから、私の苦悩が始まります。短い時間で私に何ができるのかと考えれば、何ほどのこともできないのはわかっています。けれども、何らかのシグナルは送らなければならないし、学ぶ子どもに目を向けようとするきっかけが作れたらもっとよいと思うからです。どんなにその授業に失望したとしても、その教師の未来に失望してはならないと思うからです。私の役割は、教師たちの支援者なのだし、時にはカウンセラーなのだ、そう思っています。

このたよりの冒頭、自分のやり方に固執する人のことを記しました。人は、多かれ少なかれ、自分の考えに固執しています。その状態が強過ぎると、その人は自分がつくり出しているものがどういうものなのかという事実が見えなくなります。そこを私が指摘することがあります。そのときほとんどの人に生ずるのが「守り」の表情です。私は、守りの意識に陥ったときに生まれる強張った表情に出会うと、その人の心を穏やかにさすりたくなります。そして、この人は、自分自身で気づいていないかもしれないけれど本当は不安感を抱えているのではないかと思うのです。

私は、人はどんな人でもみんな、心の奥底に「不安感」を抱えているのだと思っています。不安感をもろに表出する人も、何も感じていないように見える人も、いつもポジィティブな言葉を発している人も、だれもがあきれるほどの大口を叩く人も、表面だけではわからない思いを有しているものです。私は、それは、生きることへの「不安感」、自分自身への「不安感」だと思っています。新美南吉の童話「でんでんむしの　かなしみ」を思い起こすたびにそう思うのです。

教師たちの表情はさまざまです。でも、どんな表情をする人も、だれもが教師としての自分自身への「不安感」を有しています。しかし、その「不安感」は、「期待感」の裏返しなのだといつも思います。自分自身への期待があるから、不安感も焦りも悩みも生まれるのです。

私は、私のコメントに耳を傾けてもらいたい、そしてそれがその人の授業づくりや子どもへの対応に役立ってほしいと強く思いますが、どんな人に対してもすっとそのように行くわけがないとも思っています。対話がもたらす限界もあるでしょう。何かが生み出されるには経験が必要で、それには時間がかかるにちがいありません。そしてそれ以上に、アドバイザーとしての自分自身の限界もわかっているからです。

けれども、私は、自分が接するどの教師にも、学ぶ教師になってもらいたいと思っています。教師は学ばない教師になってはならないのです。学ばない教師は学ばない子どもを生み出すと思うからです。子どもの未来につながる仕事をしているのが教師です。だから、教師は自分を決して私物化してはなりません。自分の事実を謙虚に見つめ、学び続ける教師でなければなりません。心の奥底にうごめく「不安感」は学ぶことで癒され、学ぶことで専門性が磨かれ、教師としての自らを形成していくことができるのです。私の仕事は、私が出会う教師達に、そういう「学ぶ教師」になってもらうためのものなのだといつも思っています。